

原 著

R. ボーデの「表出体操の本質について」¹⁾ にみられる L. クラーゲスの影響について

— L. クラーゲスの「リズムの本質について」(1923・24・26年)を手掛かりにして —

菅井 京子 (びわこ成蹊スポーツ大学)

Über den Einfluß L.Klages' auf den Aufsatz "Vom Wesen der Ausdrucksgymnastik" R.Bodes

SUGAI Kyoko (Biwako Seikei Sport College)

Zusammenfassung

Anfang des 20. Jahrhunderts entstand in Europa die sogenannte Gymnastikbewegung, in der man statt des förmlichen Spieß-Maul Systems und der formalisierten schwedischen Gymnastik eine neue Gymnastik erfand. Im Zentrum dieser Bewegung stehend, fand die "Tagung für künstlerische Körperschulung" 1922 in Berlin statt. An der Tagung nahmen nicht nur die Vertreter berühmter Gymnastikschulen sondern auch PädagogInnen, TurnlehrerInnen, KünstlerInnen u.a. teil. 1923, 1924 und 1926 wurde der Bericht der Tagung unter dem Titel "Die künstlerische Körperschulung" publiziert. Auch in Japan wurden schon in den 30er Jahren in einigen Büchern die vielfältigen Tätigkeiten der gymnastischen Schulen vorgestellt. Aber in diesen Büchern gab es nur wenige Beschreibungen der verwirklichten Zusammenarbeit dieser Schulen und der Fachleute anderer Bereich. Zum Beispiel gab es nur unbefriedigende Beschreibungen über die Beziehung zwischen R.Bode (1881-1970) und L.Klages (1872-1956).

Ziel dieser Arbeit ist es, zum Nachdenken über den Einfluß L.Klages' auf R.Bode "Vom Wesen der Ausdrucksgymnastik" anzuregen. Dabei sollen R.Bode "Vom Wesen der Ausdrucksgymnastik" und L.Klages "Vom Wesen des Rhythmus" in "Künstlerische Körperschulung, 3. erweiterte Aufl." usw. berücksichtigt werden.

Die Rhythmuslehre L.Klages' hatte R.Bode stark beeinflusst. Die Begegnung mit L.Klages 1912 bestätigte Bodes Grundauffassung und beschleunigte die Entwicklung seiner Theorie der "schwingenden Bewegung". R.Bode stellte "Schwung" ins Zentrum seiner Bewegungslehre und förderte die ausdrucksvolle, lebendige und rhythmische Bewegungsschulung. Er erkannte die Eigentümlichkeit vom Rhythmus (gegliederte Stetigkeit und polarisierte Stetigkeit) in der "schwingenden Bewegung" und im "Wechsel von Spannung und Entspannung". Von diesem Ausgangspunkt aus entwickelte er seine Ausdrucksgymnastik.

はじめに

20世紀の初め頃、ヨーロッパでは体操改革運動が起こり、それまでのシュピース＝マウル方式の体操や形式化したスウェーデン体操に代わる新しい体操が求められた。このシュピース＝マウル方式の体操やスウェーデン体操は、初期にはそれぞれ独自の道を歩んだものの、19世紀後半には合理的な体操としてヨーロッパ各国に普及し、世界各国に伝えられた。当時の自然科学万能の合理的精神に基づくこれらの体操は、幾何学的で形式的な集団運動の堅苦しいものが支配的であった²⁾。その後、このような体操に対して、あまりに形式的、人為的であり、まるで鋳型にはめられた、あるいは操り人形のものであるという批判が高まり、体操改革運動が起こり、形骸化した体操に魂(命)を吹き込むことが目指された。

この改革運動の流れのなかで1922年10月5日～7日、ベルリンで、有名な体操諸派を一堂に会して、さらに体操家だけでなく教育者、芸術家、体育・スポーツの代表者たちを集めて、「芸術的な身体修練のための会議」が開催された^{3), 4), 5)}。そして、1923年にその会議の報告書である『芸術的身体修練』⁶⁾が出版され、1924年に第2版、1926年に改訂第3版⁷⁾と版が重ねられた。

新しい体操諸派の当時の多彩な活動については、すでに我が国でも早い時期から紹介がなされている^{8), 9), 10), 11)}。しかし、この体操諸派や他分野の人々がどのように関わり、体操の改革に取り組んでいったのかということについての記述は少ない。例えば、R.ボーデ(Rudolf Bode, 1881-1970)とL.クラージェス(Ludwig Klages, 1872-1956)の関係については、しばしば言及されている^{12), 13), 14), 15)}が具体的な記述はなく、検討が不十分である。

本研究では、1922年に開催された「芸術的な身体修練のための会議」の報告書『芸術的身体修練』改訂第3版(1926年)のなかからR.ボーデの「表出体操の本質について」に焦点を当て、この報告書の初版、第2版、改訂第3版に掲載され

たL.クラージェスの「リズムの本質について」を手掛かりにして、「表出体操の本質について」にみられるL.クラージェスの影響を明らかにする。

用いる主な資料は、「表出体操の本質について」¹⁶⁾、と「リズムの本質について」¹⁷⁾である。また、L.クラージェスの主張をよりよく理解するために、1944年に書かれた著者名での序文のついた『リズムの本質について』の第4版¹⁸⁾および、杉浦實訳の『リズムの本質』¹⁹⁾も重要な資料として用いる。

I. 「リズムの本質について」と「表出体操の本質について」の出版に至る経緯

1. L.クラージェスの「リズムの本質について」

杉浦²⁰⁾や千谷等^{21), 22)}によると、ルートヴィヒ・クラージェス(Ludwig Klages)は1872年12月10日、ハノーファーに商人の子として生まれた。そこでギムナジウムを終えた。その後、ライプチヒ大学でW. ヴント(Wilhelm Max Wundt, 1832-1920)²³⁾等の講義を受けたが、それに満足せず、ハノーファー工科大学を経て、ミュンヘン大学で学んだ。そこで、化学を主科目、物理学と哲学を副科目として学び、1896年に、実験化学の領域で学位を得た。またここでは心理学者T.リップス(Theodor Lipps, 1851-1914)²⁴⁾の講義を受けた。この頃からすでに彼の心は学会等で通例の自然科学の機械論的見解から離れ、最も広い意味での心理学²⁵⁾に没頭していった。彼は学会等で行われる心理学の研究に反発し、終始民間学者として活動した。

1897年、L.クラージェスはミュンヘンに「ドイツ筆跡学会(Die Deutsche Graphologische Gesellschaft)」を設立し、その学問的基礎を築いた。1903年頃、同じくミュンヘンに「表出学ゼミナール(Das Ausdruckswissenschaftliche Seminar)」を開設、第一次大戦勃発まで隆盛を極めた。1910年に『筆跡学の諸問題(Die Probleme der Graphologie)』と『性格学の諸原理(Die Grundlagen der Charakterkunde)』を、

1913年に『表出運動と形成力 (Ausdrucksbewegung und Gestaltungskraft)』を出版した。同じく1913年にマイスネルの丘で行われた自由ドイツ青年のドイツ解放百年祭で有名になった「人間と大地」を講演した。1919年、第一次世界大戦終結とともにミュンヘンを去り、チューリヒ湖畔のキルヒベルクへ移住した。同時に「表出学ゼミナール」をも移転させた。

1922年の「芸術的身体修練のための会議」で、L.クラージェスは「リズムの本質について」というテーマで自然に即した運動学の一般原理について講演をすることになっていた。しかし急病で断念した^{26), 27)}。翌年、この会議の主催者の依頼に応じて『芸術的身体修練』のなかで(同名の論文)「リズムの本質について」を公にした。この論文が本研究においてR.ボーデの体操に与えたL.クラージェスの影響を探る最初の手掛かりとするものである。

そして、彼の名著とされる『魂の疎外要因としての知的精神 (Der Geist als Widersacher der Seele)』が1929年から1932年にかけて刊行された。これが哲学学会の注意をひき、1937年にドイツ哲学会議の討論主題に選ばれた。L.クラージェスは知的精神(理性)をして魂(生命)を危うくさせるものとみなし、ロゴス中心のヨーロッパ哲学に反旗を翻した。その意味で、彼は生の哲学 (Lebensphilosophie) の有力な代表者のひとりである。

2. R.ボーデの「表出体操の本質について」

W.ボーデ (Wolfgang Bode, 1924-2004)²⁸⁾によると²⁹⁾、ルードルフ・ボーデ (Rudolf Bode) は、1881年2月3日に、商人の子としてキールに生まれた。彼は、1901年の夏学期に、キール大学に入学し、哲学と自然科学に没頭した。これはライプチヒ大学で1901-02年の冬学期に継続された。そこでは同時に音楽学校にも通った。この音楽の勉強は、1904年3月の作曲試験で終了した。1906年10月に、W.ヴントとF.クリューガー (Felix Krüger, 1874-1948)³⁰⁾のもとで博士論文

を書き、学位を受けた。その後、色々な劇場でオーケストラの指揮をした。

1909年4月に、彼はエリー (Elly Drenkmann, 1886-1983) と結婚した。この若い夫婦はスイスの音楽教育家であり作曲家でもあるE. ジャック・ダルクローズ (E. Jaque-Dalcroze, 1865-1950) のもとで体操を学んだ。1911年、R.ボーデはミュンヘンでリズム体操の最初の教授を始め、ボーデ体操学校 (Bode Schule) を創立した。1912年にはL.クラージェスとの最初の出会いがあった^{31), 32)}。1913年に発表した著書『リズム体操の目標と課題』³³⁾によって彼は彼の体操の基礎を固めた。1922年7月、最初の基礎的研究である『表出体操』³⁴⁾を出版した。

そして、1922年10月5日～7日に開催された「芸術的身体修練のための会議」に、R.ボーデも参加した。この会議でのR.ボーデの演技発表について、E.ハルテは次のように具体的に報告している³⁵⁾。全身的な運動の経過にはリズムの繊細な波が現れるとして、弛緩運動、身体を中心から始まる振動運動、さらに労働やスポーツや芸術活動のための基礎となるような弛緩運動として突く、打つ、引く、つかむ、バランス、抵抗する等々の実演が行われた。彼は、この会議の後の1923年に出版された『芸術的身体修練』の初版に「古い教育と新しい教育」³⁶⁾を寄稿し、1926年の改訂第3版ではそれを「表出体操の本質について」に差し替えた。これが、本研究で取り上げている論文である。

その後、R.ボーデは多くの著書³⁷⁾を公にした。そして1953年に『リズム体操 (Rhythmische Gymnastik)』の出版に至った。

II. 「表出体操の本質について」にみられるL.クラージェスの影響

1. リズムの本質について

R.ボーデは、1922年に開催された「芸術的な身体修練のための会議」の報告書『芸術的身体修練』改訂第3版(1926年)に論文「表出体操の本質について」を寄稿した。彼は、その冒頭の部

分³⁸⁾で、運動は生命の根源現象であり、あらゆる自然運動はリズムカルであると述べ、同書に掲載されているL.クラークスの論文「リズムの本質について」を参照するようにと注を入れている。

L.クラークスは、その「リズムの本質について」を現象研究の意味から始めている。「リズムが現象の世界に属するとすれば、それは事物の世界に属さないということである。現象の世界に関する学問は現象学 (Erscheinungswissenschaft: Phänomenologie) であり、… (略)」³⁹⁾、後に出版した著書『リズムの本質について』の第4版では、それに続けて、「事物の世界に関する学問は事実の学 (die Tatsachenwissenschaft)、あるいは原因の学 (die Wissenschaft von den Ursachen) である」⁴⁰⁾と述べている。そして、「事物として捉えるとき、私の書き机はつねに同一物であり、しかも、異なるときにおける私にとっても、他の人々にとっても、同じものとして把握される。それに対して、机の現象は絶えず変化する。それは私自身の状況によっても変化し、また人々がそれを知覚する方向、距離、照明具合によっても変化する」⁴¹⁾と説明をしている。さらに、「『同じ川のなかへ二度と入ることはできない』というヘラクレイトスの例の有名な命題を聞いて、昔の人々はきつと、『常に新しい水が流れてくるからである』という表面上の意味よりもっと深い意味を汲み取ったであろう。そして私たちは、『同じ池のなかへ二度と入ることはできない。その間に私たちが多かれ少なかれ歳をとってしまうから』とも自信をもって補足することができよう」⁴²⁾と、現象するというこの意味について踏み込んでいる。

そして、彼は、リズムの現象について、次のように説明を続けている。「世界現象がさまざまな感覚を通して私たちに伝達される限り、それは視覚、聴覚、臭覚、味覚、触覚等における現象である。したがって、時とともに推移し、それゆえたえず変化してやまない感覚事象の特徴がそのまま事象そのものの特徴となる。… (中略) …視覚

能力の (他の感覚能力に対する) 優位性を考えて、私たちは人間の感覚を直観能力 (Anschauungsgabe) という名で呼び、それによって捉えられるものを直観像 (Anschauungsbilder) と名づけているが、その直観像を得るためには、生命事象を分割した時間的断片のひとつひとつ、ほかならぬその断片が繋がらなければならない。変化してゆく直観像のそれぞれの類似性を体験することによって、その断片は相互に連携を保つのである。体験の時間性のおかげで世界の変化が現象するのと同じく、変化の直観性 (Anschaulichkeit) は類似性の体験のおかげで生じる」⁴³⁾と。

さらに、L.クラークスは、リズムの現象のように直観的に感じ取られる持続的なものに適用される概念について述べ、その概念の指示的役割⁴⁴⁾を強調している。これについては、『リズムの本質について』第4版では端的にわかりやすく、次のように説明している。「あらゆる概念は、2つの種類の判断、すなわち、把握的判断 (begreifendes Urteil) と指示的判断 (hinweisendes Urteil) の基礎となりうる。一方は思考対象に、他方は直観世界に関係する。… (中略) …概念は、判断において、あるときはより把握的に、あるときはより指示的に働く。把握的判断の役割は数量概念においてきわめて支配的であり、指示的なそれは質概念において支配的である。質概念はしたがって指示的判断の解釈に最も役立つ。赤と青という抽象概念を使って、私たちは実際の赤いと青いを区別する。しかし、その際前提とされている赤と青の現象は把握されえない。… (中略) …これらの現象が単に体験されうるにすぎないのと同じく、持続的なものの現象は理解力にとっては到達不可能な体験内実である」⁴⁵⁾と。

すなわち、リズムは把握的判断によって理解されるような性質のものではなく、指示的 (質的) 判断によってのみただ体験されるということである。これに対して拍子は把握的判断によって数量的に捉えられる。拍子は意識的精神的作業の所産であるのに対し、リズムは体験的無意識的生命現象であるのである。拍子は一種の知的精神作

業であって、同一者の反復⁴⁶⁾を目指し、リズムは生命現象であり、類似者の更新⁴⁷⁾であるとして、L.クラークスは、リズムと拍子、無意識と意識⁴⁸⁾、生命と知的精神の対立関係⁴⁹⁾へと論を展開している。

R.ボーデは、「リズムは体験の無意識的生命現象である」というクラークスの主張に、共鳴・共感して、新しい体操論を展開した。

2. リズムの本質的特徴について

R.ボーデは、『芸術的身体修練』の初版に寄せた論文「古い教育と新しい教育」のなかで、「今日の私たちの生活は常に強い意志的緊張を強いられている。それが引き起こす魂の抑圧は私たちに大きな危機をもたらす。緊張は弛緩によって解除される。緊張と弛緩の対立はリズムそれ自体にその根拠がある。弛緩は身体に再び生命を養う力を与える。…(中略)…緊張と弛緩の交替の上に構想されていないような身体教育の体系は教育におけるこれまでの混迷をただ増大させるのみである」⁵⁰⁾と述べ、「緊張と弛緩」⁵¹⁾とリズムの問題を取り上げている。そして、彼は、「表出体操の本質について」のなかで、次のようにリズムカルな動きの特徴を説明している。「子どもたちは、ほとんど休みなく動き続ける。子どもたちの動きはリズムカルである。子どもの全身は、いわば拡大された心筋である。そして心臓が常に活動しているように、…(中略)…子どもたちも動き続けることができる。なぜならば、(子どもたちの動きでは)常に緊張の後に弛緩が続くからである」⁵²⁾と。彼は「緊張と弛緩のリズムカルな交替」に、新しい体操の出発点を見いだした。彼はさらに説明を加えている。「リズムという言葉に最も相応しいドイツ語は『振り(Schwung)』である。リズムカルな遊びをすることやリズムカルに踊ることを『揺れ動く(schwingend)』という。振りには、すべてのリズムカルなものもつ対になった要因が含まれる。持続性(Stetigkeit)と分節(Gliederung)である。それゆえ、私たちは表出体操の中心に振りの運動をおいた」⁵³⁾と述べて

いる。

L.クラークスは、リズムの本質的特徴は分節された持続性(gegliederte Stetigkeit)⁵⁴⁾であるという。彼は、「流れる(ρέειν, rhein)に由来するリズム(Rhythmus)を字義通りに解釈すれば流れるもの、すなわち途切れず持続するものである」⁵⁵⁾と述べ、リズムの特徴について、巻き尺、黒板、そして波の運動の例を挙げて次のように説明をしている。巻き尺の上に規則的間隔で引かれた可視的な線は巻き尺という現象の持続性を中断するのでリズム的でない。しかし、持続性があるだけでは十分でない。黒板はリズム的とはいえない。それは持続性があっても分節がないからである。リズムは分節性と持続性を備えたものでなければならない。波の運動はリズム的である。なぜならば、上昇から下降へ、下降から上昇へ滑らに移行し、交互に反対方向に揺れる持続的交替の転向点に、持続性を保ったままで分節が現れるからである、と。

また、彼は、リズムは分極化された持続性(polarisierte Stetigkeit)⁵⁶⁾であるとも述べ、生命現象の持続性における分極性の特質としてのリズムについても次のように取り上げている。「…すべての有機生命体の現象は(同時に、もちろんその本質も)、両極に対しては全体が第三者であるような、(そのような)分極性の観点から捉えられねばならない…(中略)…ロマン主義⁵⁷⁾の哲学によれば、2つの極は、それぞれが自らの存在のために自らを補う他の存在を必要とするような、2つの交換不可能な異種の関係である」⁵⁸⁾と述べている。そして、右と左、男と女等を例に挙げている。また、中枢神経系と自律神経系は分極的であると考えられているが、この考えが「頭(Kopf)」と「心(Herz)」の通俗的な区別に心理学的にも意味深い解釈を与えていると説明している。彼は、この分極化された持続性について、『リズムの本質について』の第4版では、より簡明に「測定可能な中間ではなく、上がり下がり」と下がり上がりの質的対立(artlicher Gegensatz)が交替する現象」⁵⁹⁾と述べている。

以上のように、分節点あるいは極で途切れることのない持続性を持ち、その分節点、両極の間を行ったり来たりするようなあらゆる生命現象に、L.クラゲスはリズムを見ていることがわかる。

R.ボーデは、L.クラゲスのいう「分節化され、しかも分節点あるいは極で途切れることのない持続性を持ち、その分節点、両極の間を行ったり来たりする」というリズムの本質的特徴を、「振り (Schwung)」に、そしてその「振り」に現れる「緊張と弛緩の交替」に見て取った。そして、それを中心にして彼の体操を作り上げていった。彼は、振りの運動として、下へ、上へ、横への振りと回旋、そして応用 (目的的运动) として打つ、引く運動、さらに (ゆっくりとした振りの応用として) 突く、押す、持ち上げる運動を挙げている⁶⁰⁾。彼は、この振りの運動を通してリズムカルな動きの修練に取り組んだのである。

3. 表出体操について

R.ボーデは、「表出体操の本質について」のなかで、人間の運動に影響を与える2つの力について、次のように述べている。「すべての自然運動は、リズムカルな特徴をもつ。… (中略) …人間においても、眠っているときには、自然運動のリズムをそこに見いだす。心拍、呼吸、血液循環は間断なく持続的で、上へ下への動きにおいて分節される。しかし、私たちが目覚めている人間の方に目を向けると、突然に様子は一変することに気づく。そこには、つかえながら、切れ切れの、引き裂かれたような動きを見る。それどころか、まったく分節化されていない直線的な動きを見る。… (中略) …人間は、はっきりとした直線を作ろうとする傾向、意志、意図をもつ。完璧な自然においては、どこにも直線は存在しない。直線は、もっぱら人間の産物である。私たちが自然のなかへ分け入って、とにかく何か真っ直ぐなものに、あるいは何か幾何学的に形作られたものに基づかなければ、そこにはかつて人間がいたということがすぐにわかる。それは、人間のなかに2つ

の力が働いているということである。(人間をして) 本源的でリズムカルに揺り動かすような、あるいは旋回させるような衝動の力と、それを制御し、目的に向かって努力させるような意志 (の力) である。2つの力は、互いに葛藤している⁶¹⁾ と。この2つの力を、「古い教育と新しい教育」のなか⁶²⁾ で、彼は魂と知的精神の力として述べている。そして、彼は教育における魂と知的精神の力のバランスが崩れていることを指摘している。知的精神の原理による支配が強大になりすぎ、身体教育においてでさえ魂は瀕死の状態になっていると、主知主義や成果主義に陥った学校教育に異議を唱えている。さらに、彼は知的精神・理性中心の当時の社会的傾向、いわゆる文明社会を批判している。彼は、「表出体操の本質について」のなかで、「文明は、若者たちを皆殺しにする！」⁶³⁾ と、警句を発している。

R.ボーデは、「(幼い) 子どもは、素朴な身体をもっている」⁶⁴⁾ と述べ、「文明の悪影響を受けていない、また学校教育によって麻痺させられていない子どもたちの動きを観察すること」⁶⁵⁾ から、新しい体操を研究した。

彼は、先ず第一に、「子どもたちの動きはリズムカルである」⁶⁶⁾ と述べ、彼はそこから出発した。彼は、「振り (Schwung)」の運動に、L.クラゲスの「分節された持続性としてのリズム」を、そしてその「振り」に現れる「緊張と弛緩の交替」に「分極化された持続性としてのリズム」を見て取り、この「振り」を彼の体操の中心において、リズムカルな動きの修練を目指す体操を考案した。

次に、R.ボーデは「子どもは、常にその全身でもって活動する。子どもの運動には、決して孤立した部分運動は見いだせない。子どもは常に先ず第一に体幹で運動する。そして、そのすべての運動は結局体幹の緊張が周りに放射していくような体幹の運動である」⁶⁷⁾ と述べ、全身運動に注目した。この節においてみてきたR.ボーデの「分割された部分運動と全身運動の関係」とL.クラゲスの「拍子とリズムの関係」との間には、

アナロジーが見て取れる。L.クラークスは、拍子とリズムについて説明した箇所⁶⁸⁾で、拍子の最も重要な特性は分割の働き (Teilungsleistung)⁶⁹⁾であり、すべての分割は境界設定によってなされ、現象における境界設定にこそ唯一の本源的な知的精神行為の本領がある⁷⁰⁾と述べている。彼は、このように拍子は人間の知的精神のなす働きであるのに対して、リズムは一生物として、もちろん人間も関与しているのであるが一般的生命現象である⁷¹⁾としている。さらに、これについて、彼は次のように具体的に解説を加えている。「私たちは、メトロノームどおりに正確に再現された音楽、韻律にあわせて朗読された詩句、分列行進など、すべてこれに類する事象を、比較的魂なきもの、死せるものとして体験し、このような作業をつねに『機械的』という名で呼んでいる。『機械』という言葉を用いて表現するならば、機械は最も完全な規則現象であり、機械の運動はリズムを否定する」⁷²⁾と。R.ボーデも、シュピース=マウル方式の体操、すなわち人間の身体運動を部分運動に分割して行われる徒手体操や整列・行進を中心とする秩序運動をあまりに形式的、機械的、人為的であると批判し、全身的でリズムカルな体操を構想したのである。

最後に、R.ボーデは「子どもたちの動きは表情豊かである (<Ausdruck> 表出⁷³⁾をもつ)。このことから私は表出体操 (Ausdrucksgymnastik) に至る。… (中略) …表出は故意に行われるのではなく、動きが全身を巻き込んだ時に、全くひとりでに現れ出るのである。それは、実に表情豊か (ausdrucksvoll) であり、人が望み、適切に行われた時には、美しく、自然であり、有機的である」⁷⁴⁾、そして、「新しい体操は、同時に表出体操でなければならない。すなわち、いきいきとした生命感覚を本来的な身体運動において輝かせるような、(今日の) 人間にとって失われつつある能力を再び取り戻すのである」⁷⁵⁾と述べている。

彼は、E.ジャック・ダルクローズのもとで体操を学んだ1909年頃から、ボーデ体操学校の創設、

『リズム体操の目標と課題』の出版を経て、1922年に『表出体操』を出版する前まで、一貫して「リズム体操 (Rhythmische Gymnastik)」の名称を用いていた。R.ボーデによると、最初にリズム体操と命名したのは、ダルクローズである⁷⁶⁾。その後、リズムについての見解の相違⁷⁷⁾等から、R.ボーデはダルクローズのもとを去ることになる。この頃に、R.ボーデはL.クラークスと彼の表出学ゼミナール等に出会うのである。1922年にR.ボーデが最初の基礎的研究としてまとめた体操に、彼が「表出 (Ausdruck)」という冠を選んだことから、L.クラークスが与えた影響がいかに大きなものであったかがわかる。

おわりに

1912年のL.クラークスとの出会いは、R.ボーデに彼の構想の妥当性を確信させ、振りの運動の明解な理論構築を促した。R.ボーデは、「振りの運動」とその振りの運動に現れる「緊張と弛緩の交替」に、L.クラークスのいう「分節された持続性としてのリズム」や「分極化された持続性としてのリズム」の本質的特徴を見て取り、この「振り」を彼の体操の中心において、全身的でリズムカルな体操の一体系を作り出した。彼は、「リズムは体験の無意識的生命現象である」というクラークスのリズムの本質論に共鳴・共感して、新しい体操論を展開した。彼は、「運動は生命の根源現象であり、あらゆる自然運動はリズムカルである」と主張し、動きが全身を巻き込んだときに、全くひとりでに現れ出るような表情豊かで、いきいきとしたリズムカルな動きの修練を目指す「表出体操」を提唱した。

注および引用・参考文献

- 1) 書籍名、論文名に付した『』と「」の使い分けについて、本研究では、書籍として発表されたもののタイトルには『』を用い、書籍等のなかの一論文として発表されたもののタイトルには「」を用いた。

- 2) 岸野雄三・野々宮徹、現代体育の源流とスポーツの国際的動向、岸野雄三編著：『体育史講義』、大修館書店、1984年、108-109頁。
- 3) Medau, H., Medau, S. und Holler-von der Trenck, J., Moderne Gymnastik – Lehrweise Medau, Verlag Pohl-Druckerei und Verlagsanstalt: Celle, 1967, S. 48.
- 4) Harte, E., Tagung für künstlerische Körperschulung (5.-7. Oktober) in Berlin, Monatsschrift für Turnen, Spiel und Sport, 2, S. 410-416. 1922.
- 5) 拙稿「ドイツ体操同盟の成立に果たしたF.ヒルカーの役割について」、『スポーツ史研究』第24号、1-14頁、2010年。
- 6) Pallat, L. / Hilker, F., Künstlerische Körperschulung, Ferdinand Hirt : Breslau, 1923.
- 7) Pallat, L. / Hilker, F., Künstlerische Körperschulung, 3. erweiterte Aufl., Ferdinand Hirt: Breslau, 1926.
- 8) 大谷武一、新教育体操、目黒書店、1928年、45-83頁。
- 9) 大谷武一、新しい体操への道、目黒書店、1930年、3-130頁。
- 10) 二宮文右衛門・今村嘉雄・大石峯雄、体育の本質と表現体操、目黒書店、1933年、24-39頁。
- 11) 大谷武一、「独逸其他に於ける新体操」、宮辺富次郎編：『師範大学講座 体育 第六巻 海外に於ける主要なる体操』、建文館、1936年、1-37頁。
- 12) 二宮文右衛門・今村嘉雄・大石峯雄、前掲書、76頁、112頁。
- 13) 岸野雄三、序説運動学、大修館書店、1968年、18頁。
- 14) 板垣了平、体操論、アイオーエム、1990年、51頁。
- 15) ハンス・エッゲルト・シュレーダー、「ドイツ学究の生涯－ルートヴィヒ・クラージェスの逝去に思う」、ルートヴィヒ・クラージェス他、千谷七郎編訳：『生命と精神－ルートヴィヒ・クラージェスの面影』、勁草書房、1968年、148-149頁。
- 16) Bode, R., Vom Wesen der Ausdrucksgymnastik, In: Künstlerische Körperschulung, 3. erweiterte Aufl., Ferdinand Hirt: Breslau, 1926, S. 61-77.
- 17) Klages, L., Vom Wesen des Rhythmus, In: Künstlerische Körperschulung, 3. erweiterte Aufl., Ferdinand Hirt: Breslau, 1926, S. 142-191.
- 18) Klages, L., Vom Wesen des Rhythmus, 4. Aufl., Bouvier Verlag : Bonn, 2000.
- 19) ルートヴィヒ・クラージェス、杉浦實訳、リズムの本質、みすず書房、1971年。
- 20) 杉浦實、「解説」、ルートヴィヒ・クラージェス著、杉浦實訳：『リズムの本質』、みすず書房、1971年、127-130頁。
- 21) 千谷七郎、「訳者あとがき」、ルートヴィヒ・クラージェス著、千谷七郎訳：『意識の本質』、勁草書房、1963年、157-167頁。
- 22) ハンス・エッゲルト・シュレーダー、前掲書、135-157頁。
- 23) 岩波書店編集部、岩波西洋人名辞典増補版、岩波書店、1981年、238頁によると、W. ヴントは、ドイツの心理学者、哲学者である。実験心理学の建設者といわれる。最初医学を学び、ハイデルベルク大学の講師を経て、助教となる。当時すでに心理学に関心を持ち、感覚や知覚に関する論文がある。チューリヒ大学の哲学教授、ライプチヒ大学教授を歴任する。ライプチヒ大学で実験心理学を確立し、世界初の心理学実験室を設けた。この大学は心理学のメッカといわれた。
- 24) 岩波書店編集部、前掲書、1645頁によると、T. リップスは、ドイツの哲学者、美学者、心理学者である。ボン、ブレスラウ、ミュンヘンの各大学の教授を歴任した。心理学を論理学、倫理学および美学の基礎学と見なし、また哲学の基礎に心的直接経験をおいた。

- 25) その後、L.クラゲスは性格学 (Die Charakterkunde)、表出学 (Die Ausdrucks-wissenschaft)、筆跡学 (Die Graphologie) の道を拓いた。
- 26) Klages,L.,Vom Wesen des Rhythmus, 4. Aufl.,S.7.
- 27) Pallat, L.,Körper und Kunst, In: Künstlerische Körperschulung, Ferdinand Hirt :Breslau,1923,S.8.
- 28) W.ボーデは、R.ボーデとエリーの間生まれた3番目の子どもで、1982-2004年にはボーデ体操学校の経営管理者を務めた。
- 29) Bode,W. (Hg.), Rudolf Bode - Leben und Werk,Bode Bundes e.V.: München,1972.
- 30) 岩波書店編集部、前掲書、455頁によると、F.クリューガーは、ドイツの心理学者である。ライプチヒ大学、ハレ大学の教授を務めた後、ヴントの後任としてライプチヒ大学にもどる。彼は、ゲシュタルト派とは異なるが一種の全体性心理学の立場をとり、ドイツの色彩の濃い学説を形成した。
また、サトウタツヤ・高砂美樹著『流れを読む心理学史』(有斐閣：東京、2003年、32頁)によると、ヴントが去った1920年代以降のライプチヒ大学には、ヴントの弟子でもあったクリューガーが後任として教授に着任し、全体性心理学を作った。そのなかでは、心的全体という上位概念が提示され、いわゆるゲシュタルトや構造は下位概念として区別されている。幼児のうちはまだ未分化(全体)であったものが、発達とともに分節化されていくという考え方が全体性心理学のなかであり、直観像の研究などが行われた。
- 31) Bode,U. (Hg.), 100 Jahre Bode Schule 100 Jahre Gymnastik - Festschrift zum hundertjährigen Bestehen der Bode Schule 1911-2011,Trochos GmbH:München,2011.のS.9によると、L.クラゲスがミュンヘンで筆跡学の講習会 (Graphologiekurse) を開催した際に、R.ボーデがその講習会に参加した1912年11月7日が彼らの最初の出会いであった。
- 32) Hans Eggert Schröder, Ludwig Klages, Bouvier Verlag Herbert Grundmann : Bonn,1972.のS.63では、精神診断学セミナー (Das Psychodiagnostische Seminar) の参加者にR.ボーデの名前が挙げられている。
- 33) Bode,R.,Aufgaben und Ziele der rhythmischen Gymnastik,Verlag der ärztlichen Rundschau Otto Gmelin: München,1913.
- 34) Bode,R.,Ausdrucksgymnastik,C.H.Beck'sche Verlagsbuchhandlung: München,1922.
- 35) Harte,E., a.a.O. S.413.-414.
- 36) Bode,R.,Alte und neue Pädagogik, In: Künstlerische Körperschulung, Ferdinand Hirt: Breslau,1923,S.138-143.
- 37) Bode,W., a.a.O.によると、その後の主な著作としては、1923年の『リズムと身体修練』、1925年の『体育における精彩』、1926年の『新しい体育の道』、1930年の『音楽と運動』、1931年の『身体修練の基本運動』、1936年の『運動と構成』、1938年の『体育における身体と魂』、1939年の『エネルギーとリズム』、『生命と教育』、1943年の『ノイハウス体操』等がある。
- 38) Bode,R.,Vom Wesen der Ausdrucksgymnastik, S.61-62.
- 39) Klages,L.,Vom Wesen des Rhythmus,S.142.
- 40) Klages,L.,Vom Wesen des Rhythmus, 4. Aufl.,S.12.
- 41) Klages,L.,Vom Wesen des Rhythmus, S.142-143.
- 42) ebd.,S.143.
- 43) Klages,L.,Vom Wesen des Rhythmus, 4. Aufl.,S.13-14.
- 44) Klages,L.,Vom Wesen des Rhythmus,S.152.
- 45) Klages,L.,Vom Wesen des Rhythmus, 4.

- Aufl.,S.30-31.
- 46) Klages,L.,Vom Wesen des Rhythmus, S.163.
- 47) ebd.
- 48) ebd.,S.158.
- 49) Klages,L.,Vom Wesen des Rhythmus, 4. Aufl.,S.77.で、L.クラージェスは、さらに論を少し進めている。「拍子づけられたリズムというものがあるだけでなく、拍子を加えることによってリズムが高められることさえある。…(中略)…拍子という名の規則的現象はなんらかの特性でもってリズムに関わり合うにちがいない。したがって、もし知的精神が生命に関与すると確かにいえるならば、規則現象は同時に、対立する力の結合点(Knüpungsstelle)を意味するにちがいない。」と述べている。
- 50) Bode,R.,Alte und neue Pädagogik,S.141.
- 51) 「緊張と弛緩」は、<Spannung und Entspannung>の訳語として用いた。拙著「『ドイツ体操(Deutsche Gymnastik)』に果たしたルートルフ・ボーデの貢献について」(『スポーツ史研究』第26号、1-16頁)では、訳語として「緊張と解緊」を用いた。その注の61(『スポーツ史研究』第26号、15-16頁)では、「解緊」という訳語を用いた理由を述べた。それは、<Spannung und Entspannung>を全く別の2つのものとしてではなく、一続きのもの両端と捉えたいという思いから、「緊」という文字を共通にした「緊張と解緊」を用いたというものであった。しかし、本研究では、もう一步踏み込み、分極した2つの極はどちらも独立し主従の関係にはなく、その意味で同じ文字に拘る必要はないと考えた。そこで、一般的に辞書を調べてもない言葉である「解緊」を改め、「弛緩」を用いることにした。
- 52) Bode,R.,Vom Wesen der Ausdrucksgymnastik, S.66-67.
- 53) ebd.,S.74-75.
- 54) Klages,L.,Vom Wesen des Rhythmus, S.148-152.
- 55) ebd.,S.148.u. Klages,L.,Vom Wesen des Rhythmus, 4. Aufl.,S.26.
- 56) ebd.,S.172-174.
- 57) 平野耿、「ロマン主義」、山崎正一・市川浩編：『現代哲学事典』、講談社、1970年、659-660頁によると、ロマン主義は、18世紀から19世紀の初めにかけてドイツを中心に展開した哲学・文芸の一大思潮で、哲学上の運動としてはドイツ観念論の特異な一時期を形成し、シェリングをはじめ、シュレーゲル兄弟、ノヴァーリス、ティーク、シュライエルマッヘルらによって代表される。これは18世紀を風靡した啓蒙主義と、それを準備した17世紀的知性の哲学に対する一種の反動として興った。そこでは直接的な感情が分析的な知性よりも尊重され、力学的自然観が斥けられて、自然は「生ける自然」として把握されるとともに、有機的、目的論的に考察される。そして世界をその創造者神の自己表現として捉える汎神論的考えが復活する。しかし結果的にはドイツの社会的・経済的後進性にわざわざいわれて、ロマン主義は現実逃避と保守的な民族主義の道へ入りこまざるをえなかった。
- 58) Klages,L.,Vom Wesen des Rhythmus, S173.
- 59) Klages,L.,Vom Wesen des Rhythmus, 4. Aufl., S.74.
- 60) Bode,R.,Vom Wesen der Ausdrucksgymnastik, S.75.
- 61) ebd.,S.62.
- 62) Bode,R.,Alte und neue Pädagogik,S.139.
- 63) Bode,R.,Vom Wesen der Ausdrucksgymnastik, S.66.
- 64) ebd.
- 65) ebd.
- 66) ebd.,S.66-67.
- 67) ebd.,S.70.

- 68) Klages,L.,Vom Wesen des Rhythmus,
S.144-148.
- 69) ebd.,S.146.
- 70) ebd.
- 71) Klages,L.,Vom Wesen des Rhythmus, 4.
Aufl., S.23.
- 72) Klages,L.,Vom Wesen des Rhythmus,S148.
- 73) <Ausdruck>の訳語としては、千谷の「表現」(L.クラークス著、千谷七郎訳、表現学の基礎理論、勁草書房、1964年)がある。また、<Ausdrucksgymnastik>の訳語としては、大谷の「表現体操」(大谷、新しい体操への道、88-90頁)や、二宮の「表現体操」(二宮他、前掲書、書名および147-241頁)が有名である。表現と表出の違いについて調べてみると、日本語大辞典(梅棹忠夫他編、第二版、講談社、1995年、1842-1843頁)で、【表現】は「(名・サ変他)感情・思想などを、表情・身ぶり・言語・絵画・彫刻・音楽など、他に伝える形に表すこと。また、表されたもの。表出。expression; representation」とあり、一方【表出】は「(名・サ変自他)①表し出すこと。expression②心理学で、感情を外に表すこと。expression」とある。また、新明解国語辞典(山田忠雄他編、第七版、三省堂、2012年、1290頁)では、【表現】は「-する(他サ) <(なにに) なにヲ-する>内面的・主観的なものを外面的・感性的にとらえられる手段・形式によって伝達しようとする。…」とあり、【表出】は「-する(自他サ) 心中の感じ・考えなどを外へ表すこと。…」とある。このように、表現は他動詞として「表す」に、表出は自動詞として「表われる」と他動詞として「表す」の二通りに使われることがわかる。本研究では、これらのなかから自動詞の意味合いの強い「表出」・「表れる」に重きをおいた。L.クラークスも、「リズムの本質について」のなかでは、意識的・意図的な努力として「表す」ことよりも、無意識的・体験的な「表れる」を重要視して論を展開していることがわかる。また、R.ボーデも、無意識に湧きあがり、自然に滲み出るような<Ausdruck>としての動きを問題にして、人間が本来もっているべき豊かでいきいきとした動きを課題とする<Ausdrucksgymnastik>を掲げている。それゆえ、本研究では、<Ausdruck>の訳語として「表出」を用いる。
- 74) Bode,R.,Vom Wesen der Ausdrucksgymnastik, S.71.
- 75) ebd.,S.74.
- 76) Bode,R., Aufgaben und Ziele der rhythmischen Gymnastik (1913), S.8.
- 77) ebd.,S.8-9.